

「言葉と文字が開いていく可能性」

－特別支援担任1年生と小学校1年生の文字と言葉の獲得－

三重県歴教協 原田 聡子

- 1 はじめに
- 2 文字にも数にも興味を示せなかった1年生
- 3 担任とつながる
- 4 言語環境と生活環境
- 5 家庭とつながる
- 6 福祉とつなげる
- 7 地域とつながる
- 8 友だちとつながる
- 9 文字の習得と広がる活動
- 10 おわりに

1 はじめに

初めての特別支援学級の担任は、その経験のなさを嘆きながらも、子どもやおうちの人姿に突き動かされて自分のできる支援をしてきました。そのうちのひとりのお子さんのケースを報告します。この子をとりまく様々な状況と周りの人たちとの関わりを日々の保護者への記録から振り返ります。労働・行政・福祉・コロナ・家族・学校などの様々な問題が1年間の子どもの生活に現れてきていました。

2 文字にも数にも興味を示せなかった1年生

特別支援学級(知的)在籍のカズキさん(仮名)は、友だちとの関わりがカズキさんの力を伸ばすだろうと、四月当初、まずは交流学級の教室でともに学び始めました。しかし、1年担任や友達の話に一切興味がないように机に顔を伏せたり、話しかけられると首をぐいと反対に向けたりしている様子から、発達段階が、集団で学ぶところに到達していないと判断し、必要に応じて隣にあった特別支援学級の教室で個別学習をするようになりました。私には、この子の力がすぐには分かりませんでした。1年生担任を十年以上体験した私の記憶の中の1年生は、言葉集めに興じ、しりとりを楽しんでいました。花丸の数を数え、「早く指名して」と先生を呼んでいました。交流学級の担任として教えた支援学級籍の子の中には、ノートをはらい落とした子もありましたが、できるようになりたいという思いからの行動であり、本人がパニックになる前に声をかけ、そのつまずきを乗り越えさせれば一生懸命書くことができました。授業中いすの下にもぐっていた子も字は読めて書けました。読めないひらがながある子がいても、10までは数えることができました。数唱すらしないカズキさんは今、どの発達段階にいるのか。必死で発達心理学を思い起こすことになりました。どんな教材教具が適切なのか、どこから働きかければ力を伸ばせるのかという困惑からのスタートでした。(枠内は保護者への連絡のシート

からの抜粋です。算数と生活に関する記述は要約します。)

4/14 「初めてのなまえ」はじめは書けないと机につっぷしていましたが、同じ大きさの見本を示すと一字ずつ書くことができました。鉛筆をもつ手がふるえていました。

4/19 【算数】「5はいくつといくつ」さくらんぼの考え方にそっぽを向く。「やらん」。

4/21 手をあげて(私が手をそえました)立って、「いぬ」と答えることができました。「初めて発表できたね」とほめてもらっていました。「い」を書く時に、お手本から離れた場所になると「こ」と書きました。

4/22 プリントも音読も「やらん」と言ってしていなかったですが、最後に一緒に手をもってひらがなプリントを書きました。

5/10【算数】算数ブロックを数える練習。1~0。オウム返して唱える。ヒアリングはできる。

3 担任とつながる

通常学級と同様にまず担任と子どもがつながるところから始めました。授業から登下校にいたるまで日々関わる中で、カズキさんは、慣れた人と一対一なら、自分が話したいことは表情豊かに話せることが分かってきました。その話を聴きながら、生活をつかみ、学習を進めました。しかし、文字の習得は、何かが障がいになっており、なかなか進みませんでした。行事ごとが一段落して落ち着いて学習できるようになってきた 5 月半ばの授業記録です。国語と算数の合科です。

「ん」のひらがなプリントの絵に色をぬって、かいた文字が絵と対応していることに気づかせ、書いた文字を読んだり数を数えたりする経験を積むことがねらいでした。色を塗る様子から、この子は色彩感覚や手先の技巧性はむしろ同年代の子たちの平均以上の力があるのではないかと感じました。色ぬりの時間は短縮しようと話さざったりいっしょに色を塗ったりしています。絵の中の数も数えます。後半は、さやにはいったソラマメを使った数の学習です。まずは5までの数をつかんでほしいというとき、ソラマメのさやにはちょうどいい数の操作しやすい大きさの豆が入っていました。本人が主体的に数えたい物を探すなかで見つけて使いました。

5月14日 授業記録(下線がカズキさんの発言です)

「だってなに?」「ねいくのね、ようすみににいきたん」「いきたいから?」「うん」「へえ?」「ようすおかしいの」「それは何?車でいくの?」「うん」「だれの車でいくの?」「パパ」「あ、パパが乗せていってくれるの?」「だから、ねいくんは、うんちすると」「うんち?」「うん。ばいきんがういるすがはいつた」「ああ、うんちには**い**菌のウイルスが入ったん?へえ、そうか。大変だったね」「ねいは、かみかみして」「かみかみするの?」「おもちゃあそんでる」「おもちゃ?」「うん」「おもちゃであそんでんの?ねいくんが?」「だけど、えさたべないとおおきくならないから、えさぜんぶあげちゃったの」「全部あげちゃったん?」「だけど、ばいきんのういるすがはいつて、もうあげなくなっちゃった」「あ、ほんと」「うん」

「じゃあカズくん、ちょっと色ぬりしようか。あなた、いろぬりめっちゃ上手ってことがわかったからさ。これなん

でしょう」「にんじん」「にんじんだねえ。」「これなにこれ?はっば?」「はっばだね。にんじんからぬろう。にんじん何色?」「オレンジ」「オレンジぬってください」「葉っぱ何色?」「えっといろり」「みどり?」「うん」「きみどり?みどり?どっち?」「これ」「じゃあ先生黄緑ぬっていい?ぬるよ。ぴこぴこ」「んふ、これ、はーとだ。ねいくんおもちゃあそんでるからあ、みににきたん」「見にきたん?ほんとう。きれいにぬるね」「つぎはあ、ぴんく」「ペールピンク?」「これ、ひとのかおみたいなんつくれるよ」「ああ、そうだね。人の顔の色みたい?だいぶでも色白やな。カズくんのと全然ちがうもんな。」「うん。つぎはあ、オレンジ」「ああ、ほう。あなた、なかなか絵描きさんですわねえ。すごいねえ。上手すぎる。」「つぎはあ、あか。あか。これ。これ少ないよ」「ねいくんだっけ。忘れそうだから書いてこう。」「…」「ちゃいろ」「茶色、いいねえ」「つぎはあ、これなに?」「おうど色」「おうどいろ?」「土の色」「つちのいろ?これは」「人参って土の中にできるの知ってる?」「うん」「ああ、知ってるんだ」「じいじもにんじんたべたことあるよ。はたけで」「あ、じいじ畑で人参作ってんの?」「へええ」「だけど、やさいさいとんの、すいかも。すいかも(反芻)」「カズくんさあ、学校の畑で野菜作るんだったら何作りたい?」「ぼくはあ、すいか」「すいかかあ、すいか難しいからなあ。すいか出来たら素敵だよな。」「だってさあ、じいじさあ」「じいじすいか名人?」「うん、じいじは、すいかたねまいて、それで、みずかけて、それで、ため(べ)れるやろ。おっきい」「ほんと?」「うん」「なあ、じいじ学校へすいかさあ、作りにきてくれやんかなあ」「そうかも」「きてくれるかなあ」「だって、たねいっぱいあるから」「ほんと?」「うん」「ちょっとじいじに電話しよ。じいじ来てくれるかな」「きてくるやろ。じいじはおしごとしてるから。ようじがあるから」「これ(にんじんの文字を指して)なんて書いてあんの?」「んん、に、じ、よ?」「に」「に」「ん」「ん」「じ」「じ」「ん」「じん」「にんじん」「(絵を指して)にんじんっ」「に、ん、じ、ん」「にんじん。いろがちがうやろ」「素敵だよ。これは?これだれ?」「とんぼだ」「トンボだ」「とんぼは…」「何色?」「とんぼはあ、なにいろだっけ」「いろんなトンボがいるよ」「ああ、いっぱいいるよ。ぼくいっぱいあるで。ぼくみたよ。」「見たの?」「うん。きいて」「木で?見た?あなたがみたのぬって」「これやで。これのいろだった。」「じゃあ先生草ぬっていい?」「うん」「どの緑?緑3つあるんだけど」「くさわあ、みどり」「どの緑?これでいい?」「うん」「これしっぽがなが」「うん。長いね」「なんでとんぼはながいんだろ」「とんぼさあ、しっぽをみずにちゅんってつけてさ。あれ卵産んでんのかなあ」「だからあ、ながくなってんのか。」「そうじゃない」「赤ちゃんつくってんの」「ちがう。これちがう。これは色かわる」「お水は何色?」「えっとお、ちゃいろやろ。」「え、茶色い水?汚いな」「だってさああ、あめふってたら」「ああ、そうか」「ちゃいろい」「どれ?」「これ?おうどいろ?」「おうどいろじゃない」「おれんじ、いろがかわんの。これ。いろがかわるんだよ。これ。」「あ素敵、素敵。あなた色ぬりめちゃくちや上手なんだけど。」「水は?どんな色?」「みずはあ、あおだから」「これ?こっち?」「うん」「じゃあカズくんはとんぼぬってくださいよ。体とか、目とか羽とかありますけどどうします?」「きいろ」「うん、じゃあ黄色どうぞ」「みずはあおだから。あ、ちがったあおはちゃいろいだった。みずはちゃいろいだから」「あそうなの?ごめん青くぬっちゃったよ。」「ちがう。こうやよ(自ら青の上からぬりなおす)こう」「雨降ったんだね。あ、ちょうどよくない?素敵な色になったよ。」「はい」「とんぼの体はいいですか。」「ううん。まだ」「口もあるね。黄色い羽のとんぼ?」「はねはあ、きいろとあかとあお」「じいじはなに?ばあばもいっしょにいるの?」「うん。だけど、おしごとぜんぶしてるから、てんわしないでもいいよ」「電話しないでもいいの」「うん。」「お仕事してる?」「うん。」そっか。じゃあ無理だね。学校へ来てって言っても無理か。」「うん。…これぬって、かんせい。」…

「とんぼの羽はいくつありますか」「いち、に、さん…し」「あ、カズ四覚えた。」「じゃあとんぼの目はいくつあるかな。」「いち、に」「すばらしい。とんぼのお口はいくつですか」「さん」「一」「いち」「ちやいろだから」「にんじんいくつありますか」「いちにいさんし、いっぱいあるから」「ここは」「いっぱいあるよ。ぜんぶたねました。」「じいじの畑にはいっぱいあるの?」「ここに書いてあるのは何個ですか」「じゃあせんせいもいききたいの?」「行きたいなあ」「いいよ」「ほんと?じいじんちにくとき教えて」「でも、パパが連れてってくれるかな先生。」「うん」「だめって言うかもしれない。パパがね。そしたらカズくんが教えて。にんじんとかこんなんだったよって。」「せんせいのくるまについてきなよ。」「そうかついて行けばいいね。」「「ぼくはしろいくるまでいくから」「そうなの。パパしろい車?」「うん。くろいかも。くろいよ。」「カズくん、1234の数字覚えてる?黄色 1、黄土色2、3、オレンジで1、2、3次は?」「し」「4、よんともいうよ。」「ぼくのくるまついてきてね」「うん、ついて行くよ。でも行くとき教えてくれないとね」「ぼくは、せんせいのくるまにのりたかった」……「ママもじいじのおうちに行くの?」「うん、ママはいぬがきらいだって」「あらかわいそうに」「だって、ままはおあがり」「わんちゃんいらないから」「おあがりってなに?」「こわいよって」「こわいよって言うの?恐がりなの?ママは。きれいにぬったね。すてきです」「これなんですか」「とんぼ」「これなんて書いてあるの?」「とんぼ」「そうだね。とんぼ、にんじん。これ全部がつくの」興味なし→「よしおわった」「終わった。終わろうか」「あしたきてね。あれ、まま(め)が、まめがあるけど」

【ここまで13分。ここからは、栄養士さんが持ってきて校内に掲示してもらってあった空豆を使った数の学習です。数唱の習得には4の壁、6の壁、7と8の混同がありました。半具体物を数えることに興味をもてないようだったので、具体物を数える経験を数多くさせたいと考えていました。具体物と半具体物の間に厳然たるステップがあるとカズキさんと学ぶ中で気づかされました】

「さあ、かずくん、豆いくつ?」「おっきい」「おっきいよ。これ、ほら。」「まめはいってんの?これ」「豆入ってるよ」「ふふふふ、とれちゃった」「とれちゃった。」「これ、かずくん、見て」「ため(べ)れやんよ」「これ何豆やった?」「何豆?」「そ」「そ」「ら」「ら」「ま」「ま」「め」「め」「空豆」「そらまめ」「空豆いくつ入っていますか」「え、じいじもさいたよ。これ」「数えて」「いち、にい」「じゃあこれは?」「さん、いち、さん」「ん?」「ふふふ」「ふふふ」「一からでしょ。せーの」「いち、にい、さん」「そうだねえ」「じゃあこれ、クイズです。何個入っているでしょう。」「あれ?いち、に、さん、ろく!」「あれ?違うなあ。なんやった?」声を合わせて「いち、にい、さん…」「ろく!」「違う。いち、にい、さん、S——」「し?」「いち、にい、さん、し」「あああ」「これな」「ほんとに1,2,3,4か見てみる?」「開くかなあ」「あくかな」「開いた」「あいた」「開くかなあ開くかなあ」「あくかなああ」「開くかな」「はっ」「はっ、これさあ、ためれないよ、おっきいの」「そうだね、これな、茹でたら食べられるよ」「ゆれ(で)?なんかこつめた」「ふわふわだよ」「ふわふわ?これベッドみたい」「ほんと、ベッドみたい。お豆のベッドみたい」「そやな」「な」「うっちっちゃ!」「うん、いくつ?」「いくつ?数えて、ほら」「いち、にい、さん、ろく!」「ぶー」「いち」「にいい、さん?S——」「しいい」「これぜんぶた(だ)したらさあ、これかぞえるかも」豆を出しながら「いち、にい、さん、S——し」「これは?」「これは?」「ご、次は?」「1,2,3,4,5…」「これは?」「全部出して」「こもついちゃった」「そこもベッドある?」「うん、ほら、ふわふわだから」「ふわふわだね。ほんとだね」「さあ、数えてください。いくつですか」「1,2,3,4,ろく」「5」「ご」「もう一回」「1,2,3,4,5」「ご!」「もう一回」「1,2,

3, ろく!」「あ〜んふふふ」「1, 2, 3, 4,」「…ろくっ」「5」「ご」「6はまだです。」「1, 2, 3, しち」「4」「し」「ご」「ご」「これは?」「6, 次6だよ。やっと」「1, 2, 3, 4, 5」「ご」「6」「ろく」「7」「しち」「8」「はち」「9」「きゅう」「あれ。9の次は?」「なにもない」「ない〜。だから、これ、豆さん全部で9こ。」「そうなん?」「うん」「もっかい数えてみ。せーの」小声で「1, 2, 3, 4, 5」「て?」「5, 6, 7, 8, 9十がない。10, 5がない」」「じゃあ、これが、しまとこ」「しまとこか」「1, 2, 3」「1, 2, 3さん3しか入らんのか。」「じゃあ、次は?1, 2ベッドふたつ」「カズくん、数えてやって」「いち、にい、」「間違えないよ。3の次は何やったかな」「3」「次は、次は6じゃなくてなんやったかな」「1, 2, 3」「ろく」「ろくじゃない。何やった?1, 2, 3?」「1, 2, 3, 4」「そうだ、ね」「しまとこ」「返してこうか。何豆?」「そらまめ」「空豆です。ね。」

この記録の発言から、カズキさんは、じいじの家での経験に基づく豊かな感性をもっていることが分かります。個別で関わることで、「やらん」という一斉授業の中での発言が「わからんからやる気になれない」であったことが分かりました。特別支援学級で学ぶ子どもたちは、その力がアンバランスなのは分かっていますが、それにしても、この子も持っている能力を十分に伸ばしてきていないと感じることの多い春でした。この後「じいじのおうちにいつ来るの?」の根気に負けて、父親の許可を得て、連絡をとらせてもらうことになりました。また、この後、学級園ですいかを育て、夏には支援学級の仲間で収穫したすいかを食べる体験につながった授業でした。

5/14【算数】ソラマメを数えたり、ひらがなプリントの絵を数えたりしました。1.2.3.4がかなり言えるようになりましたが油断をしていると1.2.3.6になってしまいます。

4 言語環境と生活環境

家庭訪問を重ね、カズキさんの話に度々登場する「じいじ」と話し、カズキさんの育ちの背景が見えてきました。具体的なことは書けませんが、カズキさんに感じる言語や文字に対する経験不足は、幼児期からの家庭の言語環境がその一因であるように思えました。

その一つは、片方の親の母語が日本語ではないということです。過去に日本語指導を担当した年度に、現実に出あったケースから私は家庭での言語環境について考察したことがありました。

私たちは、家庭で育つ場合、身近な大人の語りかけで言葉を覚えます。生まれたときから日本語社会の中にいたとしても乳幼児期のほとんどは家庭の中にいます。家庭でのコミュニケーション言語が日本語ではない場合、日本語の言語感覚を身につけることなく育ちます。園に入るとき、すでに日本語にハンディがある状態なので、他の子が同学年の幼児や家族以外の大人とのコミュニケーションでさらに言語感覚を身につけていくのに追いつけない子もでてきます。(どの子もそうだというわけではありません。)小学1年生になり、日本語が学習の対象となったとき、そのハンディが明らかになります。しかし、理解できないのは注意散漫なせいではないかなどと言語環境の影響に考えが及ばないまま過ぎることもあります。日本の家庭で育った子が幼児教育の場で空気を吸うように吸収してきていることをその時期の言語理解が不十分であったがために体

験としてもっていないことも多々あり、その影響は中学年をすぎても残っていた場合があります。算数の文章題に黙って固まってしまった5年生と対話する中で「先生、『かだん』って何?」と言われたとき、その問題にはなくてもいいような「花壇」というたったひとつの言葉が学習の障がいとなるのだと思知らされた体験があります。

海外から転入した子は、当然「日本語が話せない」と周囲がみて、対応してもらえます。しかし、日本で生まれ、日本で育っている子はケアされることなく見過ごされることが多いのです。彼らは、社会の中で日本語に赤ちゃんの時から接し、幼児教育も日本で受けていると見られますから、当然日本語は話せて、同学年の子どもたちと同レベルに日本語を使いこなせると思われてしまいます。特に、両親のうち、片方の母語が日本語の場合はそう思われがちです。カズキさんは、この一番見過ごされがちなケースでした。

カズキさんの日本語の発語は5才と祖母、3才半と母親から聞きました。だとすれば、現在の言葉の発達段階は納得できます。母親にカズキさんが母親の母語を理解できるかと聞いたとき、「分からない。できないと思う」という返事が返ってきました。ほぼ母親の同胞のコミュニティができていたアパートで育った、カズキさんが子どものときから生の声で一番耳になじんだ言語は、母親の母語だったろうと推察されます。しかし、母親は、その言語を教えてはいないため、カズキさんは、母親の母語も身につけてはいないようでした。

以前担任した一年生の中に日本語理解が十分ではなく、学習や学校生活に困難のある子がいました。この子は、片方の親の母語が日本語であるにもかかわらず、家庭でのコミュニケーションが祖母と母の間以外英語で行われているという言語環境で、日本語を使う機会が生活の中にありませんでした。そういう個々の事情が分からない段階で、障がいがあり特別支援学級で学ぶ対象の子なのか、それとも言語だけの問題なのかは小学校1年生の通常学級の担任には判断できませんでした。カズキさんの場合は、数の認識などから、やはり知的に特別支援の対象であることに変わりはなく、言語の問題は、その指導にあたり、考慮すべき一要因であると考えられました。言語の習得は、カズキさんの可能性を伸ばす鍵だと思われました。カズキさんには、これ以外にも、考慮すべき環境要因が重なっていました。担任として、彼をとりまく環境自体を支援の対象ととらえ、ひとつひとつにアプローチしていきました。

5 家庭とつながる。

家庭とのつながりは、次のようにできていきました。

- ・一緒に下校し、家庭での放課後の様子を知る。
- ・登校前に家を訪ね、母親といっしょに登校を見送る。
- ・家族の一日の生活を知り、朝のことは母親に、夜のことは父親に話す。
- ・母親が自身の生い立ちを話してくれる。
- ・父親に承諾をとり、祖父と会ってカズキさんの生い立ちや家族の様子を聞き、現在の家族の暮らしぶりや学校での現状を伝える。

積極的に家を訪問することで、母親に日本の学校のありようを理解してもらい、学校への対応を支援しました。信頼関係ができるに連れて、母親から「先生、あがってもいいよ」と言ってもらえるようになり、自身の生い

立ちも話してくれるようになりました。学校への提出物などは、実際にやって見せ、目の前でしてもらうことで、母親の学校への関心や理解も高まり、支援が実をむすぶようになりました。普通なら余計なお世話と拒否されるレベルですが、このご家庭は受け入れてくれました。また、特に、祖父とつながれたことで、父母ではケアしきれなかったカズキさんの放課後の生活が充実したものとなり、家庭での学習支援も受けられるようになりました。

5/10 宿題に取り組みなかったり途中までになったりしたときは学校でします。もたせてください。

5/11 「はなのみち」お母さんに音読をきいてもらってください。ローマ字をふりました。

5/25 3時から夕方までひとりて動画を見ているようです。ご存じですか。

5/28 「ひとりて宿題してきた」とひらがなプリントと算数プリントを朝から見せてくれました。

5/30 「おなかがすいた」と朝から学習に取り組めないことが多いので、お母さんに聞きました。時間がなかったり機嫌がわるいと食べられないのですね。

6/1 「困ったときに黙っていないで伝えられるようになってほしい。」というお父さんの願いをお聞きしました。最近少しずつできるようになっています。今日も、体育の時間、「おなかがいたい」と言えました。

6/24 「ママときのうおおきなかぶをよんだよ」とうれしそうに教えてくれました。

7/4 作文「うんどうかい」ぱぱとはるちゃん(妹)がみました。ぼくは、はずかしかったです。はしるのをがんばりました。(聞き書き。最後の一文は、隣に書いたお手本を見て書きました)

11/6 作文「はっぴょうかい」いえなかったからいやでした。ままがきてくれました。ぼくは、いえませんでした。きてくれてうれしかったです。(となりに聞き書きしたお手本を見て全文自分で書きました。)

体育館での発表会に家族は間に合いませんでした。しかし、その後母親が来てくれて、母親にとっての初授業参観が教室でたっぷりとできました。作文にかいてあるとおり、体育館では言えなかった台詞が、教室で母親の前ではっきりと大きな声でいえました。

6 福祉とつなげる

夏休みに入っても、カズキさんは、家庭では、ひとりて長時間過ごしていました。校区の学童保育は、年に一度、冬にしか申し込むことができません。そこで、放課後等デイサービスを利用できないかと市役所の福祉関係の課に出向き、制度の利用方法や費用について聞きました。まずは、自分が理解して、その道筋を保護者に伝えないと、保護者が動けないと思ったからなのですが、制度をよくわかっていない筋違いの私は、「親がくるものだ」とげげんな顔をされて帰ってきました。

私が困っているのに気付き、助けてくれたのは、すでに放課後等デイサービスを長年利用している同じ学級の高学年の子のお母さんでした。「先生、まず受給者証をもらう必要があるのだけれども、市役所は、担当者を選んで相談しないとだめ。〇〇さんのいるときに行きなさい。正規の職員ではないけれども、一番親身にな

って動いてくれるし、各放課後等デイサービスのこともよく分かっている。私も一年生に入ったときたらい回しのような役所の対応に苦労したからよく分かる」と〇〇さんにつながる電話番号まで教えてくれたのです。7月末に、このままではいけないと感じさせる出来事があり、心配した祖父が助言にしたがって窓口に行き、その担当者に相談をし、9月から放課後等デイサービスを受けることができるようになりました。

この季節外れの申し込みを受け入れてくれた放課後等デイサービスは、学校との連携を大事にする相談支援事業所のように、担任の私もいっしょに祖父の家でその施設の相談支援専門員の方と打ち合わせを行いました。その後も学校とデイの情報交換を呼びかけてくれています。

放課後等デイサービスの利用は、2つの点でカズキさんの生活と学習の環境に大きな変化をもたらしました。まず、それまでひとりで過ごしていた平日の放課後の時間に、人と関わるようになったことと、宿題をする習慣がついたことです。もう一つは、放課後等デイが祖父の家にカズキさんを送り届けるようになったため、平日の夜も祖父の家で人と関わり、言葉のやりとりをしながら過ごすようになり、学校からの日々の連絡も祖父が必ず見て対応してくれるようになったことです。この2点で、カズキさんの生活はそれまでとは比べものにならないほど安定しました。福祉との連携、特別支援学級の親同士の情報交換の大切さが分かりました。今までできていた保護者交流会などが、コロナで全て中止となっていましたが、その大切さが身にしみました。

10/5【宿題】「3枚?2枚にしたら?」という不満そうだったので、今日は、算数をやめて、ひらがなのプリントを3枚にしました。「たくさんできるー!」とひらがな「ふねのふ」「もものも」「すいかのす」と3枚持ち帰りました。名前を書くとき、「これであって?」と文字の向きに意識がむくようになりました。

宿題は、どれをしてくるか本人が決めていました。「これはデイ、これはじいじんちです」と自分で見通しをもって持ち帰り、必ずして出すことができました。プリントを11枚持って帰って、10枚してきたときには驚きました。

7 地域とつながる

カズキさんは、地域の二人の方にたいへんお世話になり、支えてもらいました。

一人は、アパートの大家さんです。外国からきた働くお母さんたちが託児のために使えるようにアパートの一室を開放し、無償で園児や児童の放課後の生活や朝の登校を支えてくださっていました。カズキさんも集団登校に遅れて大家さんに車に乗せてきてもらったことがありました。

もう一人は、毎日、家までおかえに行って、根気よく優しく語りかけながら登校に付き添ってくれた地域の見守り隊のおばあちゃんです。学級園で育った大根にそえてカズキさんの手紙を届けたときには、ていねいなやさしいお返事をいただき、しばらく廊下に掲示していました。

1/19 Kさんに、「大こんありがとう。カズくんえがじょうずですね。」とお礼の手紙をもらいました。

このお二人とも、私は、道ばたでよく情報交換をし、お礼の気持ちを伝えていました。学校に電話をもらってしばらくいっしょに歩いたこともありました。

また、私が前年度日本語指導を担当していた6年生の女の子も、力になってくれました。母語がカズキさんの母親と同じなので、朝むかえにいて母親と母語で話すことができました。本来は一ヶ月で終わる上級生としてのお迎えを長く続け、カズキさんと歩調を合わせて手を引いて歩いてくれました。カズキさんは、ほとんど学校を休むことなく遅刻することなく入学からの一年をすごせました。3人の助けがなければ、カズキさんは、登校できなかった日があったと思います。

8 友だちとつながる

交流学級と特別支援の教室は隣あっていました。隣の授業の声は、支援教室に届いていました。交流学級の担任と相談し、グループ活動や表現活動をするときは、国語や算数でも交流学級で授業を受けるようにしていました。クラスには、同じ保育園から来た子が何人かいました。入学式に遅れてきて、会場に入れなかったカズキさんを式のあと外まで来ていっしょに走って心をほぐし、記念写真のときだけは参加できるようにしてくれたのは保育園のお友達でした。

4/15 Aさんが、「保育園ではしゃべらんだけど」と教えてくれました。

6/8 Yさんと読書の時間に仲良く一冊の本を見ながらお話していました。

6/9 Hさんが「カズくんが『これもってくの』『もってくよ』って普通にしゃべってくれた」とうれしそうでした。このごろ「みんなと1年の教室です」と意思表示をしてひらがなプリントにひとりで取り組めるようになりました。

6/10 音楽の時間の变化 今まではつまらなさそうに参加しなかったのですが、今日は自分から聞き取れた言葉をメロディーにのせて（聞き取れない部分は鼻歌で）歌い、リズム打ちも自発的にすることができました。集団参加ができてきたことと、言葉、リズム、メロディーが耳に入るようになったことで、自分の体が自然と動くようになってきたことの現れだと思います。

7/1「おおきなかぶ 音読劇」1 班の発表をにこにこしながら見ていました。自分の番がくるともじもじしていましたが、とても小さい声ですが台詞が言えました。

7/8 Yさんに「見せて」と言えました。全回はいえませんでした。書写の時間に前の席の子が「ちょっとおかしいなあ」「こうして…」と優しく書いて教えていました。「こう？」とにこにこいて教えてもらっていました。うれしい成長です。自分から話しかけたり友達から話しかけられたりしています。

12月8日【なぞなぞ】

カズキさんは、制作が好きです。折り紙で熱心で作っていた作品について話してくれたことを題材に、国語の時間になぞなぞを作ってノートに書きました。コピーを廊下に掲示しました。

いろいろな学年の子が読んで考えていました。数日後に、作った船も掲示しました。隣の教室の交流学級の子だけではなく、通りかかったいろいろな学年の子

なぞなぞ
えんとつがあるよ。
やねがあるよ。
いかりがあるよ。
オールもあるよ。
エンジンもあるよ。
なんでしょう。
カズキ

が読んで考えていました。

作った船も数日後に展示しました。カズキさんは、「すごいね」と話しかけられていました。(このノートは、板書を見て書く練習の一環でもありました。)子どもたちどうしをつなぐひとつの仕掛けでした。

12/10 【ともだちクイズ】前にお友達のことを書いた文を先生が読んで、誰のことをか当てるクイズをしました。カズキさんのときは、みんなが分かって、みんなで答えました。うれしそうでした。

11/18 日直のスピーチで、レゴで遊んだことを恥ずかしがりながら言えました。声が小さかったので、一番前の席のNさんが聞こえたことをみんなに伝えてくれました。

12/21 外でTさんとおいかけっこをして元気に遊べました。

2/24 【今日のきらきらさん】かえりの会で、Aさんが、「今日、カズくんが学習ルームの本をとってくれました。」と言ってくれました。

交流学級の友達との関係は、交流学級の担任によるところが大きいと思います。個性的な子の多いクラスでしたが、担任の先生のていねいなかわりによって、よく子どもどうしがつながっていました。その中で、Aさんも自然な形で授業や学活に参加していくことができました。

9 文字の習得と広がる活動

ゆっくりでしたが一歩ずつ、カズキさんは、ひらがなという文字を習得していきました。

カズキさんが最初に読めたのは、「あ」でも「し、つ、く、へ」でも自分の名前に使われている文字でもなく「すいかのす」でした。生活の中で一番話しかけて相手になってくれるおじいちゃんが栽培していたからだと思います。書くテストで「ふ」が「へ」の次にかけてたのも、カズキさんの好きな「ふね」「ヘリコプター」の頭文字だったからです。2年生になった今でも、字を思い出すとき、「た」いこ? 「あ」り? と言葉まるごとをまず思い出すカズキさんです。1字が1音をあらわし、「すいか」が「す+い+か」であることが理解できるまでに3ヶ月かかりました。半年以上かけて友達と「しりとり」ができるようになりました。

覚えたことがうれしかったのでしょう。自分のおもちゃや制作物によく数字やひらがなを書いていました。作文は、受け身のことが多かったのですが、休み時間などに、自分の書きたい字を質問しながら、書きたい言葉を書いていくという活動もするようになりました。

一年間特別支援学級を担任して、気づいたのは、これまで教えてきた子たちと同様に、今のその子の発達段階を見極め、その時々適切な場、適切な時間、適切な課題を用意することが、その子の学習意欲や成長につながるのだということでした。子どもたちを笑顔にし、その力を伸ばすために、実態把握の方法についての見識を深め、過去に編み出され、蓄積されているに違いない教材教具を知り、さらにひとりひとりのその時々合うように工夫していきたいと思います。通常学級以上に柔軟に、本人のニーズに近いかたちでそれらを子どもたちに提供できるのが特別支援学級なのだと思います。

一方で、今だけではなく進路を見据えた指導も必要です。私はまだ、そこが見えないまま、日々におわっていました。これも、人との交流の中でつかんでいきたいです。

親族、友達のお母さん、近所の方、学校、役所、放課後等デイサービス…とさまざまな方がカズキさんとその家族に関わって支えてくれました。必要ならば、学校も、何かをできない家族を責めたり放置したりするのではなく、可能な限りその家族と周りの人たちをつなぎ、家族をも支援する立場でいたいと思います。子どもたちに対するのと同様で説諭だけでは何もわかりません。「〇〇してもらえない」とあきらめなければ具体的な行動をスモールステップで身につけていってもらうことのできる家庭があります。カズキさんの家族にここまで関わったのは、お母さんとお父さんが心を開いて私の介入を受け入れてくれたからでした。その背景に、目に見えたカズキさんの成長があったと思います。カズキさんを育てていくことにその成長という希望が感じられたことで、父親も学習状況に積極的に感心をよせるようになってくれました。

様々な国にルーツをもつ子どもたちが増え続けています。県内には、地元で生まれ育った子をうわまわる数の子が通う小学校も出てきています。言語の違いによる生活や学習に向かうときの困難には特別な支援が必要です。市は、母語スタッフをおき、「いっぽ教室」という来日した子どもたちへの日本語の通級指導教室を設置しています。しかし、その対象からこぼれおちている年齢の子がいます。小学校1年生と高校生です。

さらに、人との関わり方に支援の必要な子たちは、日本語の習得も遅れがちです。外国人児童生徒の発達障害は、今県内の支援団体でも注目されているようで、先日研修会の案内が学校に届いていました。

最後に、子どもを支援していくのに必要不可欠であるにもかかわらず、福祉や医療現場と学校の連携に課題が残りました。本レポートに具体的なことは書いていませんが、児童相談所の関わりには疑問を感じました。学校現場の担当者への説明も聞き取りも一切なかったからです。しかし、福祉の現場にいた知り合いが、児童相談所の業務が逼迫していることを教えてくれました。ひとりひとりに丁寧に関わる余力はないということです。また、学校とは違う視点から見えていることもあるのは分かります。新たに我がこととして感じられた課題でした。他の子のケースですが、医療機関ともっと直接連携できたらと思ったことも多くありました。